第18回国際日本文学研究集会研究発表（1994.11.11）

幕末・明治期の「蒙求」

"MENG－QUI" IN THE BAKUMATSU AND MEIJI PERIODS

国文学研究資料館　相　田　　満＊

The title of that old textbook for educating and enlightening chidren, *Meng-qui*, has become foreign to our ears of late and on account of this in modern and contemporary Japan as well as in its native land, China, it is almost completely ignored and forgotten. However, if we take up even a single area, the role it played both in Japanese culture until the beginning of the Meiji period and in Chinese culture, in particular in primary and secondary education, it was extraordinarily important. Indeed, one can hardly conceive of the depths of its influence on all aspects of culture.

The face that this book, more properly this set of books called *Meng-qui*, was repeatedly brought into being in many forms over many years with the participation of the most famous intellectuals of each period gives us a hint of it.

During the process of bringing this book or books called *Meng-*

＊AIDA Mitsuru 国文学研究資料館助手。中央大学大学院文学研究科修了。東京都立本所工業高等学校教諭を経て現職。主に日本文学における中国典籍の受容についてを研究している。論文に「中国故事の古層と新層－類林系類書と『蒙求』をめぐる問題について－」（『和漢比較文学叢書18』平6、汲古書院）などがある。

qui into being, it is fair to say that there was something particularly notable in the numbers appearing during the bakumatsu and Meiji periods. This can well be called the last and greatest brilliance which was produced in the conflict between the old culture and the new.

This paper will quarry what can well be called the final period of this old textbook for educating and enlightening children, *Meng-qui*, in the long history of its reception, i.e. the bakumatsu and Meiji periods, and will carry out an analysis centering on the numbers of this book, more properly this set of books, which appeared called *Meng-qui* all the while entwining it with the trend of large numbers of other textbooks for educating and enlightening children appearing.

はじめに

幼学啓蒙書『蒙求』という名は、今では耳慣れなくなってしまい、近現代の日本、さらには本国の中国でも殆ど省みられなくなってしまった。しかし、その果たした役割は極めて大きく、明治初頭までの日本や中国の文化、特にその初等中等教育面だけを取り上げてみても、文化の各方面への、さらには深層にわたる影響は、むしろ想像を絶するものがあろう。

そのことは、『蒙求』群とも呼ぶべき一連の書籍が、当代著名の知識人の関与を得ながら、長年にわたり、多種多様に、かつ繰り返し成立したことが一つの示唆を与えてくれる。それらの書籍は、幕末・明治期に特に顕著な輩出状況を示しているが、それは、旧来の文化と新たな文化との相克の中で生み出された、最後にして最大の輝きとも言えるのである。

本稿は、かような幼学啓蒙書『蒙求』受容の長い歴史の中から、最末期ともいえる幕末・明治期を切り取り、『蒙求』および『蒙求』群とでも呼ぶべき一

群の書籍の輩出状況を中心に、他の幼学啓蒙書の輩出動向と絡めつつ分析を試みるものである。

【1】浩斎所蔵千文蒙求二種書目

文化文政期のこと。『千字文』や『蒙求』を蒐集する趣味が嵩じて、自らの書庫までも「千文山蒙求寺」と名づけた長崎浩斎（寛政(1799)11年9月7日～元治(1864)元年9月14日、66歳）という人物がいた。幼名を哲治郎と言い、文化(1812)9年に健と改名、康斎と号し、同14年にはさらに浩斎と号を改めたが、他にも橘（本姓）、確斎（字）、玄貞・愿禎（通称）、剛健、仲正など、随時使い分けていたようである。

彼は、杉田玄白の高弟大月玄沢に師事しており、高岡の長崎家には彼との往復書簡が多く残される。また、杉田玄白『蘭学事始』の小石本（岩波古典大系底本）上巻末に「九幸老人小伝」を「浩斎長崎健識」と記して寄せてもおり、『近代著述目録後編』[1]巻3（東条琴台・輯、天保(1842)13年6月序、明治(1868)元年追記）には、その著述を〔資料1〕のように記している。

〔資料1〕長崎浩斎著述目録（『近代著述目録後編』）

長崎浩斎	半千文一	和蘭医学解嘲一
名建字	医話三	和魂漢才二
越中高岡人	医学物語二	籤舎随筆二
家蔵千文蒙求書目一	百医蒙求一	医経千文校刊一

長崎家は、本姓萩原氏、初代玄澄（孫兵衛）が肥前長崎で蘭学を15年学び、故あって客中、越中高岡にて療治を行ったところ、効験があったので、そのまま高岡に卜居するに至ったものである。長崎姓は、その功績を称賛する意図を含んで、誰言うことなく、長崎々々と呼びもてはやされた結果、自称するに至ったものらしい。（長崎玄庭「長崎家譜」〈文化(1804)元甲子年記〉[2]）

長崎家の第５代にあたる浩斎は[3]、『千字文』や『蒙求』を愛好することひとかたならず、それぞれ数十百種を集める他、自身の書庫を「千文山蒙求寺」と名づけ（阿波加修造『春塘随筆』[4]）、さらにはその書目『浩斎所蔵千文蒙求目録』を出版するに及んだ。その冒頭には編纂の趣旨が「取次書店代舌」にて〔資料２〕の如く記されている。

〔資料２〕『浩斎所蔵千文蒙求目録』取次書店代舌[5]

取次書店代舌

越中高岡ノ医家長崎浩斎先生性癖
ニシテ千文ト蒙求ヲ愛玩シ数種ヲ
聚メ猶書柬ヲ以テ予輩ニ求メラル
今已ニ蔵セラル丶所此ノ如シ此外
ニモ和漢数種アリト雖トモ只其目
ヲ見ラレタル迄ニテ未タ其本ヲ得
ラレス四方ノ君子此目録ヲ見玉フ
テ此中ニ漏タル千文及蒙求ヲ蔵シ
玉ハ丶願クハ予輩ニ送リタマヘ若〔以上3オ〕

譲リ与フル 丿ヲ惜ミ玉ハ丶唯拝借
ヲ乞フ速ニ謄写シテ返璧スヘシ
凡目上△ヲ加フルハ写本也猶版本
ヲ募リ求ムルノ号也
凡目下〇ヲ加フルハ首句也御池上ル所ヲ加
フルハ末句也
文政八乙酉冬日
京都御幸町御池上ル所 橘屋儀兵衛
大坂心斎橋通安土町 加賀屋善蔵
江戸浅草新寺町 和泉屋庄次郎〔以上3ウ〕

同書は、前半４丁に５行取で「浩斎所蔵千文書目」を、後半１丁に10行取で「浩斎所蔵蒙求書目」を配し、冒頭に先述の「書店代舌」１丁を収めた計５丁程の書である[6]。しかし、かような書が大坂・京都・江戸の三都の書肆により版行された事は、浩斎の人望と、当時の『千字文』『蒙求』の盛行を裏付けるものといえよう。

本書に刊記は記されぬが、文政（1826）９年に師匠である大槻玄沢の七十初度の祝賀記念として、「千文目録」10冊を贈り物にしている書翰が残されているところから、刊行はおそらく「書店代舌」に記される文政（1825）８年か、翌年早い内（正月

か）になろう[7]。

浩斎は非常に交際範囲の広い人物であったが、その一人に東条琴台がいた。琴台と浩斎との交際の親密さは、彼の寄せた「長崎浩斎先生肖像」画賛〔資料3〕から推測されるが、さらに琴台は、長崎浩斎の前著に倣い、跡を継ぐ形で、慶応元年七月に『補訂浩斎所蔵千文蒙求目録』を著している。都立中央図書館日比谷加賀文庫に収められるのは、その自筆本である。

〔資料3〕長崎浩斎先生肖像画賛[8]

（賛文）

結交四十年同志冀前賢旁薄南
山倒精通北斗懸青雲将世変白
眼逐時薬篭元行冲文詩蘇老泉隋
珠憐病客燕石笑神僊淹雅常情矣
宏猷毎斐然知音惟我在泣啼堪絶絃
浩斎長崎先生挽詞　東条耕囘拝印

【2】補訂浩斎所蔵千文蒙求二種書目

『補訂浩斎所蔵千文蒙求二種書目』の著者、東条琴台は、寛政（1795）7年6月7日江戸芝宇田川町の町医享哲の三男に生まれ、幼時は伊東藍田、倉成龍渚、尾藤二洲、山本北山、太田錦城、さらには寛政11年（琴台五歳）に刊行された『旧注蒙求』の校刊者、亀田鵬斎にも就いて学んだ人物であることから、幼時より、『蒙求』に対する素養と関心は、並一通りのものでなかったと推察される。

この書が執筆された翌年の慶応（1866）2年には、彼は高田藩校修道館の教授として招聘されているところから、おそらく学生教導のための資料作成の一環として、本書が執筆されたのであろう。

琴台の「補訂」には、「蒙求」についての考証が述べられており、当時の「蒙求」への理解と享受の様相をよく伝えている。

〔資料４〕東条琴台の『蒙求』考証（「補訂浩斎所蔵千文蒙求二種書目」より）

①蒙求行世也旧矣。未可詳其始。知読之者。蓋在於室町氏時耶。我土旧本。首載饒州刺史李良天宝五年八月一日薦蒙求表。又載趙郡李華序。二人之為唐臣。不竢弁論。徐子光序曰。時己酉仲冬之月辛卯吉日。己酉宋真宗大中祥符二年。神宗熈寧二年也。雖不可知徐子光之為人。蓋不在于南渡以後。晁公武郡斎読書志曰。蒙求三巻。右唐李瀚撰。纂経伝善悪事実類者。両両相比為韻語。取蒙卦童蒙求我之義名其書。蓋以教学童云。由是観之。瀚之為唐人也決焉。而乾隆四庫全書曰。蒙求二巻江蘇将曹瑩家蔵〔以上13オ〕晋李瀚撰。瀚始末未詳考。李匡乂資暇集。称宗人瀚作蒙求。則亦李勉之族。五代史桑維瀚伝称。初李瀚為翰林学士。好飲而多酒過。晋高祖以為浮薄。当即其人也。其註不著撰人名氏。案陳振孫書録解題曰。補蒙蒙求八巻徐子光撰。以李瀚蒙求為之注。本句之外。兼及他人事。所言与此書合。惟八巻之数与此本二巻不同。然此本巻数帙頗重。蓋後人以八巻合併也。其書以蒙求原文冠於巻首。後以毎二句為一節。各為之註。註雖稍嫌冗漫。而頗為精核。下略

謹案清高宗不世出君。而好学貴賢。包羅才彦。乾隆中年〔以上13ウ〕済々多士。唐宋所不企及。経文緯武過絶前古。旁以至重典籍。訪捜遺書。以紀昀陸錫熊孫士毅三人為総纂。使編輯四庫全書提要二百巻。同簡明目録二十巻。自正総裁劉統勲。至監造劉淳。三百六十余員。全匱之秘。名山之蔵隠索括古今。無有遺蘊。隋唐以降所未曽有也。其考究真偽。評隲醇疵。最作充当。不容疑喙於此。然引資暇集暨五代史。而證李瀚之為晋人。其不可解一也。以三巻為二巻。其不可解二也。其注。不知名氏。依書録解題。是求知読書志。其不可解三也。彼土擬李瀚蒙求者数種。而至於乾隆文化之〔以上14オ〕盛。不知唐与五代其不可解四也。彼土通行之諸本。不載李良表李華序耶。其不可解五也。宋史芸文志目唐李瀚蒙求三巻。邱延翰蒙求三巻。是未読宋史。其不可解六也。紀昀陸錫熊孫士毅。其学術之宏博。高宗之所深知。而其疎漏如此。②近時我土先輩。嘗謂清人之学術。過絶于明人一等。其好尚之論特瞶々。不可信用。余於此一事亦復爾々。

③蒙求集註二巻　　晋李瀚撰宋徐

子光注四庫全書著録所収。翰作瀚。今清人講習者是也。

……（中略）……

慶応元年乙丑七月朔旦起稿二十八日浄書成〔19オ〕

唐李瀚撰の『蒙求』は、唐玄宗の天宝（746）5年[9]の成立以来、日本・中国・朝鮮にわたって息長く享受され、文学・教育はおろか、日常語彙に至るまで大きな影響を与えた書である。同書は、故事暗誦の便を図るために作られた四言詩に注が付されたもので、扱われる故事の内容が広博である点、意匠の独創性故に、それを受容するそれぞれの時代・国において、様々な形の注の改変と、異種『蒙求』とでも呼ぶべき続撰書の輩出を促し、近代に至っている。

長崎浩斎や東条琴台の「書目」中に見える、『蒙求』部分の記述は次の通り。[10]

〔資料5〕

①長崎浩斎所蔵の蒙求書目（刊本）

蒙求関係　　1種

異種蒙求　　19種（書込2種を除く）

計20種（含書込計22種）

②東条琴台補訂の蒙求書目

蒙求関係　　25種（内書込4種）

異種蒙求　　45種（内書込4種）

計70種

＊書込は琴台自筆による　　①②の合計92種

掲載される書目には、すでに存否不明のものもあるが、『千字文』や『蒙求』関係の書目をとりまとめようとした試みは、類例を見ない。（なお、中国においては、『永楽大典』巻24に「続蒙求等書名」と記される目次のみが伝わるが、

当該の巻は散佚している。)

『蒙求』関係の類書の存在が意識されるのは、『蒙求』注釈書や異種『蒙求』の執筆・編纂時に、序文にその先例を求めるために、考証を行うことが契機となる場合が多い。事実、長崎浩斎には、『医経千文』の校刊や、『百医蒙求』の著述もある。東条琴台も、何か関係の著述を志していたのであろう[11]。

琴台の考証〔資料4〕は、中国では『蒙求』撰者李瀚を唐の人としないことの誤りについて論じられている。このことは、『四庫全書総目提要』において、李瀚が晋の人と記されたこともあり、日本でもその誤謬を承けた注釈が最近まで見受けられたものである。琴台はこの考証で、「近時我土(くに)の先輩。嘗て「清人の学術は、明人の一等に過絶せり」と謂ふ。其の好尚の論特(ただ)に瞶々たり。信用すべからず。余れ此の一事に於いて亦た復た爾々(しかじか)といふ。」(波線部②)とまで言い切り、清代の考証学を批判しているのである。

また、引用箇所末尾(波線部③)には、「蒙求集註二巻」が清人の講習に使用されると記されるが、これは学津討原本に該当し、中国人研究者は、現在でも徐子光注本にこれを使用し、古注系では佚存叢書所収の『古本蒙求』を使用している。

ところで、この考証は「蒙求の世に行はれるや旧し。未だ其の始まりを詳かにすべからず。之を知り読む者は蓋し室町氏の時に在るか。」(波線部①)という言辞より始まる。日本における「蒙求」の渡来と受容の始まりは、今なお不明だが、記録上では元慶(878)2年8月25日に、陽成天皇皇弟貞保親王の披香舎の読書始の儀に講されたという『三代実録』の記事が初見とされる(『扶桑集』巻9に詩序を収める)。また、鎌倉時代の元久(1024)元年に著された源光行の『蒙求和歌』の存在も知られていたろう。しかし、この「之を知り読む」という享受態度が、四言の標題を主体とした講釈から離れて、注を中心に読む態度、つまり宋の徐子光の補注による、いわゆる新注の渡来・享受以降[12]を念頭に置いたものと考えれば、この指摘も正鵠を得ていると言える。

江戸時代、『蒙求』の注は、服部南郭や岡白駒等に代表される多くの人の校訂を経ながら成った徐子光の新注（補注）を通して享受されたが、徐子光注の趨勢にともない、『駒谷芻言』（松岡梅友）に、

晋書王戎字濬沖ト云ヨリ以下ハ、蒙求ノ註也。然ルヲ、此本文ヲ標題ト覚へ、註ヲ本文ト覚タル人多シ。（『随筆大成』第１期）

ともあるように、注が長文化した結果、その注文自体を本文として認識するという変化が起こった。徐子光の新注は、各故事の出典へのあたり直しが施され、校勘が行われたので、従来よりもやや長文の記述と内容を持つに至ったのである。その結果、『蒙求』は注自体を読み物として享受する作品へと質的な変化を遂げたのであった。

『蒙求』といえば、「勧学院の雀は蒙求をさえずる」という諺が連想される程、幼学書入門書として代表的なものである。しかし、「勧学院の雀」が蒙求を囀った平安の頃は、旧注が通行しており、享受の主体は標題の四言詩にあったので、「王戎簡要　裴楷清通　孔明臥龍　呂望非熊……」と標題を素読する黄色い声が、雀のチュンチュンという囀りにも似ているようにとらえられた場面[13]も多くあったろうが、徐子光注を使用して教授する形態になってからは、こうした囀りを聞く光景も、旧注の通行した時代より少なくなったようである。

【３】教材としての『蒙求』

『蒙求』が、新注である徐子光注に移行したことで、読み物的性格が強まると、その幼学・入門書としての性格にも変化が生じた。元来の、幼学書・入門書という社会的通念は残されるものの、実質的には、内容的にやや難度が高くなったのである。実際に『蒙求』が、教育課程の中でどのような位置を占めていたかについて調べてみると、“「蒙求」＝子供向きの読み物”というそれまでの通念と学習段階での実際の位置付けとが、教学の場では乖離していたことがわかる。

『日本教育史料』に記される範囲内ではあるが、旧藩校で使用された漢籍使

用の順位表〔資料６〕によれば、『蒙求』は第一七位の六九校、ほぼ三割の藩校で使用されていたことになる。一方、『千字文』は上位20位の圏外にあったことも注意を引く。

〔資料６〕近世藩校漢籍使用表（尾形裕康『近代日本における千字文型教科書の研究』106頁［早稲田大学出版部、昭53・３〈文部省・日本教育史資料巻１～８を使用〉）

順位	書　名	使用藩校数	順位	書　名	使用藩校数
1	論　語	226	11	史　記	143
2	孟　子	222	12	小　学	125
3	中　庸	217	13	孝　経	113
4	大　学	216	14	漢　書	112
5	詩　経	215	15	十八史略	108
6	礼　記	212	16	国　語	90
7	書　経	211	17	蒙　求	69
8	易　経	208	18	唐宋八家文	64
9	春　秋	197	19	文　選	60
10	左氏伝	153	20	文章軌範	59

このことは、かつては幼学書として、卑近な俗書として、『唐書』にも『日本国見在書目録』にも挙げられなかった（『千字文』は「見在書目録」に載る）『蒙求』が、上記一覧中の如き経史子集の各書に伍する位置にまで“出世”したと言える。

さらに、旧藩校の教育課程において、『蒙求』がどのような階梯で教えられていたかについて、いくつか具体的な事例を紹介しよう。

〔資料７〕福沢諭吉『旧藩情』（明治10年５月脱稿）〔富田正文編『明治文学全集８　福沢諭吉集』筑摩書房、昭41．３〕

第四、上等の士族は衣食に乏しからざるを以て文武の芸を学ぶに余暇あり。或は経史を読み或は兵書を講じ、騎馬槍剣、何れも其時代に高尚と名（なづく）る学芸に従事するが故に、自ら品行も高尚にして賤しからず、士君子として風致の観る可きもの多し。下等士族は則ち然らず。役前の外、馬に乗る

者とては一人もなく、内職の傍に少しく武芸を勉め、文学は四書五経歟、尚進て蒙求左伝の一、二巻に終わる者多し。特に其勉強する所のものは算筆に在て、此技芸に至りては上等の企て及ぶ所に非ず。蓋し其の由縁は、下等士族が稍や家産の豊なるを得て仲間の栄誉を取る可き路は唯小吏たるの一事にして、此吏人たらんには必ず算筆の技芸を要するが故に、恰も毎家教育の風を成し、如何なる貧小士族にても此技芸を勉めざる者なし。今を以て考ふれば算筆の芸固より卑しむ可きに非ざれども、当時封建士族の世界に之を卑しむの風なれば、之に従事する者は自から其品行も賤しくして、士君子の仲間に齒せられざる者の如し。譬へば上等士族は習字にも唐様を学び、下等士族は御家流を書き、世上一般の気風にて之を評すれば、字の巧拙を問はずして御家流をば俗様として賤しみ、之を書く者をも俗吏俗物として賤しむの勢を成せり。(教育を異にす)

〔資料８〕旧福江藩校育英館の学科表（『日本教育史料』第３冊巻８西海道）

福江本校及郷校学科表				
学科	四級	三級	二級	一級
読書	皇朝　三字経 大統歌 漢　三字経 孝経四書	古学二千文 蒙求　智環啓蒙 書経　博物新編	国史略 元明史略 英仏　単語　会語	三史略 大意講解 地学初歩　文典
手習	平仮名　片仮名 数字　名頭国尽 往来物	私用 公用 文章	設題 私用文章	仝上 公用文章

〔資料９〕旧長岡藩崇徳館の教則（『日本教育史料』第４冊巻10）

教則（此条ハ遷善閣ニ付テ云フ）初メ四書五経唐詩選古文前後集蒙求文選等ノ順序ニ従ヒ素読セシメ終リテ 通常ノ人ハ大体蒙求迄ヲ終レハ夫レニテ止ム 質問課ニ入リ四書詩経書経左伝

国語史記等ノ講義質問ヲナサシム

〔資料10〕旧府内藩遊焉館の教則（『日本教育史料』第3冊巻8西海道）

教則　凡階級ヲ十等ト定メ毎月勤情ニ由リ黜陟ヲ加ヘ板図ヲ改ムル事　八歳初メテ入学セシヨリ退隠迄板図ヲ除カサル事○無級　四書素読調ヘ相済者一級昇進ノ事○五経素読調ヘ相済者二級昇進ノ事○論語孟子講義調ヘ相済者三級昇進ノ事○十八史略元明史略学庸本文小学独見相済者四級昇進ノ事○四級　**史記蒙求日本外史暗記八家文義詩文試業調ヘ相済者五級昇進ノ事**○五級　左伝令義解明律書経詩経講義温史暗記詩文試業調ヘ相済者六級昇進ノ事○六級　六級以上ハ国書漢籍好ニ任セ調ヘニ及ハス学術上達後後進誘導行届者人望ニ従ヒ昇進ノ事○七級　訓導○八級　講官○九級　督学　傑出ノ者此級ニ登候事○五級以上昇進ノ者ニハ賞金遣候事

〔資料11〕旧狭山藩簡修館の教則（『日本教育史料』第1冊巻1畿内）

教則

素読科　三字教、千字文、大学、中庸、論語、孟子、易経、書経、詩経、春秋、礼記、文選○解義科　十八史略、元明史略、日本外史、**蒙求**、世説、劉向新序、綱鑑易知識、史記、左伝、孝経、逸史、通鑑攪要、三国志、文章軌範、七書

福沢諭吉の『旧藩情』〔資料7〕には、旧中津藩の文学修得の階梯を記した条があるが、これによると、『蒙求』は四書五経の後、左伝の前に位置している。

また、旧福江藩育英館〔資料8〕では、『蒙求』は読書科の三級に属する課程で教授されることになっているが、これは、孝経や四書の後に位置する。そして、旧長岡藩崇徳館〔資料9〕では、名目上は文選が素読課程の最後に置かれているが、注記に「通常ノ人ハ大体蒙求迄ヲ終レハ夫レニテ止ム」とあるよ

うに、『蒙求』は、実際は素読の最終課程であった。

その他、旧府内藩遊焉館〔資料10〕では、『蒙求』の習得は、十等級中の四級に位置し、この階梯を終えて五級に進めば賞金が遣わされるとある。旧狭山藩簡修館〔資料11〕では、素読科から解義科へと次第に難度を上げて行く排列になっているようで、『蒙求』は解義科の第四番目に据えられている。

以上列挙したものは、典型的なものにとどまるものの、『蒙求』の教育課程における位置は、素読を終えた中級者の教科書であったと言ってよかろう。

しかし、ここで一つ留意せねばならないことは、『蒙求』には、幼学の訓育に必ずしも相応しからざる内容が含まれるといった批判があったことである。

その批判は、古く中国宋代に見えており、宋の陳振孫『直斎書録解題』巻十四、類書類「蒙求三巻」に、「有甚暁不可者。余家諸子在褓、未嘗令誦此也(甚だ暁(さと)る可からざる者有り。余が家の諸子は褓(むつき)に在りては、未だ嘗て此を誦へ令めざるなり)。」との批判がある。

日本でも、「蒙求ニ迷ヒシ小録モノ、先祖ヨリ伝来セシ禄ヲ軽キコトニ思ヒ、暇ヲ取(とり)、又ハ欠落ナドシテ儒者ト名ノリ、江戸ニ出タレド、思ノ外(ほか)人モ思ヒズ、コマリハテ、遂ニ売講師トナリ、野僧ノ口涎(よだれ)ヲ舐(ねぶ)り、飢ヲ助ルモノ多シ」(『駒谷芻言』)との辛辣な批評も見られる。

これは、『蒙求』には雑多な話が取り込まれているので、道義的に不純な要素が混入していること、さらに、六朝老荘風の故事逸話にかぶれて、身を誤る危険があるということなどの理由で起こった批判であろう。

また、『蒙求』には、李良の「薦二蒙求一表」に、「瀚家児童三数歳者、皆善諷誦、談レ古策レ事、無レ減二鴻儒一。不二素諳知一、謂疑二神遇一。(瀚が家の児童三数歳なる者も、皆善く諷誦し、古を談じ事を策ること、鴻儒に減ずる無し。素より諳知せざるものは、謂ひて神遇と疑ふ。)」と、深い素養の無い者でも、あたかも大学者の如き知識をひけらかすことができるという効用があるが、それは一方で、中途半端な教養人風の人物を生み出す土壌になりかねないという、現代の受験用知識偏重教育の抱える、さまざまな問題と共通する面もあるようである。

このように『蒙求』は、毀誉褒貶相混じった評価を受けたものであったが、それでも息長く享受されたのは、やはりそれだけの魅力を持った書であったからであろう。

そして、このような『蒙求』の性格と人気が、逆にそれを補完したり、一部の特徴を敷衍した性格の、異種『蒙求』を生み出す要因ともなったのである。

【4】『蒙求』・異種『蒙求』の盛行

『蒙求』は、次のような性格を持つ書といえる。

まずは、多量の典籍からの摘録された、人物の逸話・故事集であること。また、人物名2字と、その人物の故事を象徴する評語を、原典から摘出（あるいは創出）することによって創られた四言の韻文を有すること。そして、書名の由来ともなった発蒙・啓蒙、つまり入門の性格である。

異種『蒙求』は、上記の要素をそれぞれに敷衍して成り立ったものと言え、その取材にあたっては、普段の読書の営みの中で蓄積されたものを基礎資料にするものが多い。そして、その摘出された故事に標題を付け、四言の韻文に仕立て上げる行為は、文人の創作意欲を随分刺激したようである。

以下〔資料12〕に、文化年間以降、明治期迄に輩出した『蒙求』および異種『蒙求』の書目を、成立の年記の明示されているものに限り紹介するとともに〔資料13〕において、〔資料12〕に掲出の表をもとに輩出状況を分類し、グラフ化を試みた。（なお、参考までに尾形裕康氏の調査[14]をもとに、『千字文』・異系『千字文』の輩出状況をグラフに加えた。）

〔資料13〕のグラフを見ると、次の2点が注目される。

1．『蒙求』群の発生件数よりも、『千字文』群の発生件数の方が多い。

2．両書群とも明治期に顕著な発生の増加を見るが、『千字文』群の方が流行の開始が早く、終息も遅い。

『蒙求』の体裁は、『千字文』を先蹤としている[15]。しかし、『千字文』は、千字という限られた字数で組み立てられた標題の字自体を覚えさせるという手

習いの色合いが濃い。『蒙求』のように標題の韻文を触媒として、それに付属する人物故事を習得させることを目的とするものとは、教育課程上の到達点が異なる。『千字文』は、『蒙求』よりも、より根底的な基礎力を養成することが目的となっており、『千字文』よりも『蒙求』の方が難度が高いといえるのである。

このことは、周興嗣『千字文』（周系『千字文』）の体裁に倣った異系『千字文』においても、同様である。ただし、『千字文』群の作成にあたっては、精選された必要最小限の字を、重複なく並べた四言詩を作り上げるという、高度な言語遊戯が要求されるので、簡便な分量に終わるものが多い。

〔資料12〕蒙求・蒙求型類書一覧（成立年判明分のみ）

凡例：1．輩出状況をグラフ化する必要上、成立年を確定できるもののみを掲載する。

下記表に掲載されないものについても、いずれ別稿を予定しているが、以下の文献も併せて参看せられたい。

○相田満「『蒙求』型類書の世界」（和漢比較文学叢書８『和漢比較文学の諸問題』所収、汲古書院、昭63．３）

○早川光三郎『新釈漢文大系　蒙求（上・下）』（明治書院、昭48．８・昭48．10）

2．表中の記号は、以下のことを示している。

［成立元号］

＊：成立の元号表記を、中国の紀年表記で記したものであることを示す

［書名］

▲：蒙求注釈書（中国成立のもの）

△：蒙求注釈書（日本成立のもの）

□：異種蒙求（中国成立のもの）

○：異種蒙求（日本成立のもの）

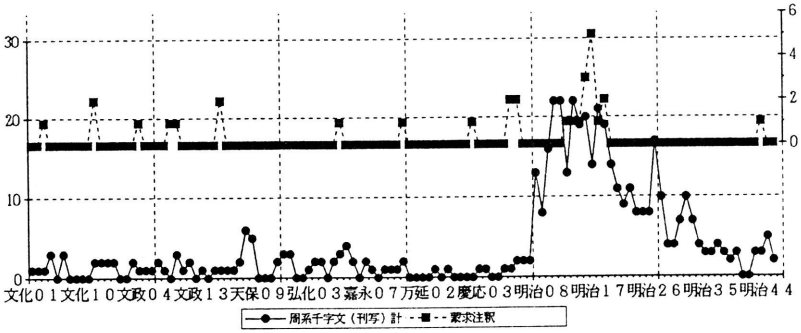
○□：中国成立異種蒙求の日本注釈書

成立元号・年	西暦	刊写別等	書　名	巻冊数	作　者
＊嘉慶０７	1802	序	□家塾蒙求	五巻	清 康基淵
文化０１	1804	刊	□○官板　純正蒙求	三巻	元 胡炳文
＊嘉慶０９	1804	刊	▲学津討原本　蒙求集注	二巻	
文化０２	1805	刊	○医林蒙求	三巻	樋口器（丹台・好古）
文化０３	1806	刊	□○佚存叢書（具化竜左氏蒙求）	一巻	林述斎／校
文化０３	1806	刊	□△佚存叢書（増注蒙求）	二巻	林述斎／校
文化０４	1807	刊	○孝子蒙求	一巻	加藤熙
＊嘉慶１２	1809	刊	□高厚蒙求	六巻	清 徐朝俊
文化０８	1811	刊	□○左氏蒙求	二巻	元 具化竜・樋口邦古
文化１１	1814	修刊	△新刻蒙求国字弁	六巻	服部南郭・宇野成之
文化１１	1814	再刊	△旧注蒙求	三巻	亀田鵬斎
＊嘉慶２０	1815	刊	▲李氏蒙求詳注	三巻	清 陳宸書
文政０３	1820	刊	○蒙求標題詠	一巻	樋口器（丹台・好古）
文政０８	1825	刊	□○十七史蒙求	一六巻	宋 王令・岡崎元軌
文政０８	1825	序	○国史蒙求標題	三巻四	衣笠孝郷
文政０８	1825	刊	（△）浩斎所蔵千文蒙求目録	一巻	長崎浩斎
＊道光０６	1826	再刊	□家塾蒙求	五巻	清 康基淵
文政０９	1826	刊	△経典余師　蒙求	三巻	桃華園
＊道光０９	1829	刊	▲李氏蒙求補注	六巻	清 金三俊
天保０１	1830	序	○皇朝蒙求	三巻	山下直温
天保０３	1832	刊	△蒙求箋注例引	一冊	（不明）
天保０３	1832	刊	△箋注蒙求校本	三巻	岡白駒
天保０６	1835	写	○医療蒙求	二巻一	汲田参友
＊道光１８	1838	刊	□文字蒙求（字学蒙求）	四巻	清 王琦
天保１０	1839	序	○史伝摘抄	二〇巻	鮫峯戊申
天保１４	1843	刊	○扶桑蒙求	三巻	岸鳳質
天保１５	1844	刊	○桑華蒙求	三巻	木下公定（英峯）
嘉永０２	1849	刊	△新増箋注蒙求	三巻	平田豊愛
嘉永０４	1851	刊	○芸林蒙求　初篇	六巻	松田順之
嘉永０７	1854	刊	○和漢事類蒙求	二巻	重富鼎
安政０５	1858	刊	△箋注蒙求校本	三巻	岡白駒・佐々木向陽
慶応０１	1865	刊	○自警蒙求	二巻	藤沢恒（南岳）
明治０３	1870	修刊	△補注蒙求国字解	六巻	田興甫・松平禎
明治０３	1870	刊	△校訂箋注蒙求校本	三巻	岡白駒・東固碩
明治０３	1870	謙	○大日本史蒙求	五巻六	吉川全節
明治０４	1871	後刊	○扶桑蒙求	三巻	岸鳳質
明治０４	1871	刊	△箋注蒙求読本	三巻	岡白駒
明治０４	1871	刊	○和漢孝子蒙求	一巻	加藤熙
明治０４	1871	刊	○英学蒙求	一冊	関思明
明治０４	1871	刊	△箋注蒙求校本	三巻	岡白駒・佐々木向陽
明治０６	1873	刊	○世界蒙求　前篇	二巻	平井正・松居直房
明治０７	1874	刊	○格致蒙求	一巻	柏原学而
明治０８	1875	刊	○西洋蒙求	一冊	Anec Dote
明治１０	1877	刊	○敬矛餘滴　続篇（一名　本朝蒙求）	三巻	植本寧
明治１０	1877	刊	○敬矛餘滴（一名　本朝蒙求）	三巻	植本寧
明治１２	1879	刊	△簒評箋注蒙求校本	三巻	石川鴻斎
明治１３	1880	刊	△標疏箋注蒙求校本	三巻	岡白駒・佐々木向陽
明治１４	1881	刊	○日本蒙求　初篇	二巻	堤正勝
明治１４	1881	刊	○皇朝蒙求	三巻	山下直温
明治１４	1881	刊	○標題箋注続蒙求校本	三巻	黒神直臣・石村信一／標注

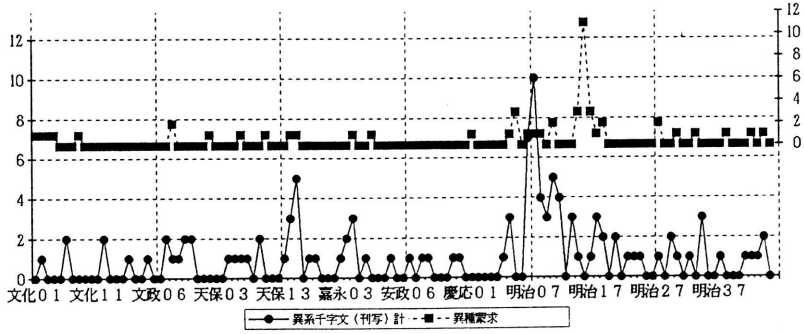
成立元号・年	西暦	刊写等	書　名	巻冊数	作　者
明治１４	1881	刊	△訓蒙蒙求国字解	三巻	島野磯之丞
明治１５	1882	刊	○□純正蒙求校本	三巻	元 胡炳文・村上義友
明治１５	1882	刊	○□刪正評記箋註純正蒙求校本	三巻	元 胡炳文・林敏太郎
明治１５	1882	刊	○□純正蒙求校本	三巻	元 胡炳文・亀山雲平
明治１５	1882	刊	○□箋註純正蒙求校本	三巻	元 胡炳文・近藤元粹
明治１５	1882	刊	○日本蒙求　続篇	二巻	堤正勝
明治１５	1882	刊	△箋注蒙求校本	三巻	岡白駒・佐々木向陽
明治１５	1882	刊	△整頭箋注蒙求校本	三巻	鈴木義宗・増田貢
明治１５	1882	刊	○□純正蒙求校本	三巻	元 胡炳文・村山義行
明治１５	1882	刊	○箋注桑華蒙求	三巻	木下公定（葵峯）・福田宇中
明治１５	1882	刊	○瑞穂蒙求	二巻	和達嘉
明治１５	1882	刊	○□純正蒙求校本	三巻	元 胡炳文・村上信忠
明治１５	1882	刊	○皇朝蒙求字引	一巻	山下直温
明治１５	1882	刊	○万国蒙求	三巻	栖本有則
明治１６	1883	刊	○□校訂純正蒙求集釈	三巻	元 胡炳文・五十川鑑一郎
明治１６	1883	刊	△箋注蒙求校本字類大全	三巻	森山達
明治１６	1883	刊	△蒙求校本字引大全	三巻	伊藤慶孝
明治１６	1883	刊	△補注蒙求国字解	六巻	田興甫・松平禎
明治１６	1883	刊	△箋注蒙求校本字類大全	三巻	河村与一郎
明治１６	1883	刊	○□評釈純正蒙求箋本	三巻	元 胡炳文・藤沢恒（南岳）・土屋弘
明治１６	1883	刊	○東西蒙求	二巻	山賀新太郎・辻元篤次郎
明治１６	1883	刊	△標疏増訂箋注蒙求校本	三巻	岡白駒・佐々木向陽・佐々木貞介
明治１７	1884	刊	△標疏箋注蒙求校本	三巻	岡白駒・佐々木向陽
明治１７	1884	刊	○□纂註純正蒙求	三巻	元 胡炳文・山井幹六
明治１８	1885	刊	△標疏箋注蒙求校本	三巻	岡白駒・佐々木向陽
明治１８	1885	刊	△箋注蒙求校本	三巻	岡白駒・佐々木向陽
明治１８	1885	刊	○□純正蒙求講義	三巻	元 胡炳文・戸谷孝・精谷憲吉
明治１８	1885	刊	○幼童教訓蒙求	二巻	村井清
明治２７	1892	刊	○近世醒世蒙求	一巻	天野景保
明治２７	1894	刊	○□左伝蒙求	一巻	松本豊多
明治３０	1897	刊	○英武蒙求	一冊	依田学海
明治３３	1900	写	△蒙求読本解釈熟語成句解・箋註蒙求読本解釈	合四冊	加藤虎之亮
明治３８	1905	刊	○広島蒙求	一冊	小鷹狩元凱
明治４２	1909	刊	□禅苑蒙求拾遺（続蔵経所収）	二巻	（不明）
明治４３	1910	刊	△選注蒙求通解	一冊	井上経重
明治４４	1911	刊	□中外蒙求	一冊	清 張廷彦

〔資料13〕『蒙求』群と『千字文』群の輩出状況

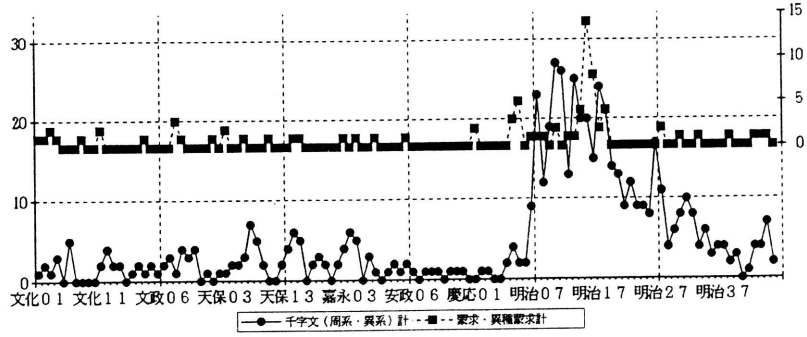
周系『千字文』と『蒙求』注釈書の輩出状況



異系『千字文』と異種『蒙求』の輩出状況



『千字文』群と『蒙求』群の輩出状況



一方、『蒙求』は、原撰ですでに五百九十六句という長編の韻文標題を有しており、さらには注も付属して広まっていたこともあるので（注と本文の関係が逆転したという経緯も関係あろう）、三巻というやや長編の作物となっていることが多い。これは異種『蒙求』においても同様である。『蒙求』型類書が『千字文』型類書の輩出状況と比べて、件数的に劣るのは、こうした原撰自体の分量差も関係していよう。

また、内容面においても、先述の如く『蒙求』型類書の方が、『千字文』よりも高次の教育課程に位置していることが影響しているだろう。それは、輩出状況の量的な差、さらには時間差となって現れている。（推測をさらに重ねれば、時間差の発生原因の一つに、『千字文』享受の世代の成長が、後の『蒙求』ブームを喚起したとも考えられる。）

幕末期刊行物の特質として、時代変化への対処に関する著作や、一般庶民向けの寺子屋用教科書が主流商品となってきたことは、多くの研究者の指摘する所である。しかし、残念ながら、異種『蒙求』の場合においては、残存する典籍は多いのだが、それが具体的にどの学校で、どのように教授されていたかには、十分な記録が残されていないため、使用の実態が不明な点が多い[16]。しかし、冒頭で紹介した長崎浩斎の『千文蒙求目録』のように、単なる目録書を三都の書肆から刊行するに足る程の異種『蒙求』の需要が、市場にあったことは確かである。書肆側にも、市場動向を調査するという意図もあって、目録出版の企画に応じたのではなかろうか。

『蒙求』型類書の輩出状況は、江戸期と明治期との間に約10年の停滞期がはさまれるものの、明治３～４年にかけて盛行の兆しを見、再び一時の小康状態に帰している。これは、明治４年７月（1871）の文部省設置、さらに翌明治５年の学制施行により、教科及び教科書に対する施策が欧化主義に傾いたため、従来型の『蒙求』型類書の輩出が、一時低調になったものと思われる。

しかしそれでも、明治６年～８年には『世界蒙求』・『西洋蒙求』など、時

流に合わせたものが現れており、時流への素早い対応を見せている。また、明治７年に出た『格致蒙求』も、当時先端の科学知識を採り入れた博物入門書として編まれたもので、やはり欧化主義の反映した作物である。

その後、『蒙求』型類書は、明治(1881)14年から18年に至るまで、明治15年を頂点とする輩出の最盛期を迎えるが、明治期輩出の異種『蒙求』の特色として、貴顕・著名知識人の関与を受けたもののあることが注目される。

中でも、中村敬宇（正直）は、『格致蒙求』（柏原学而）、『瑞穂蒙求』（和達嘉）、『皇朝蒙求』（山下直温）等に序を寄せ、『続蒙求校本』（黒神直臣・石村信一）の校閲にも携わっており、彼の啓蒙活動の広範な様子がうかがえる。また、前述の『格致蒙求』は徳川慶喜の侍医でもあったことから、題字を勝海舟に戴いており、書名も徳川慶喜の好んだ言葉にちなんでいる[17]。

このように『蒙求』型類書が、斯界の著名人の関与を受けて刊行されていることは、この書群が、高踏的な立場から啓蒙を行う意識で編纂されていることをよく示していると言えよう。

『蒙求』の書名は、『周易』に蒙の卦に、「蒙亨、匪㆓我求㆒童蒙㆒、童蒙求㆑我」

とあるにより、「蒙昧幼稚な者を啓蒙すれば、その者はよく亨通し、これを啓蒙することは、我が方から童蒙に求めるものではなく、童蒙の方から来て我に求める」という意を踏まえる。著名人・貴顕の権威を借りることは、自発的な向学心を求める書名の原義からはやや離れるような気もするが、逆に『蒙求』自体の権威を高める効果もあったと思われる。

夏目漱石『吾輩は猫である』第６回に、研究のためにガラス玉ばかり磨く羽目となった寒月をからかって、迷亭がその様を奇特として「新撰蒙求」に採り入れたいものだとからかう場面がある。

——此正月からガラス玉を大小六個磨り潰しましたよ」と嘘だか本当だか見当のつかぬ所を喋々と述べる。「どこでそんなに磨つてゐるんだい」「矢

つ張り学校の実験室です、朝磨り始めて、昼飯の時一寸休んで夫から暗くなる迄磨るんですが、中々楽ぢやありません」夫ぢや君が近頃忙しい忙しいと云つて毎日日曜でも学校へ行くのは其珠を磨りに行くんだね」「全く目下の所は朝から晩まで珠許り磨つて居ます」「珠作りの博士となつて入り込みしは――と云ふ所だね。然し其熱心を聞かせたら、如何な鼻でも少しは難有がるだらう。実は先日僕がある用事があつて図書館に足が向くとは余程不思議な事だと思って感心に勉強するねと云つたら先生妙な顔をして、なに本を読みに来たんぢやない、今門前を通り掛つたら一寸小用がしたくなつたから拝借に立ち寄つたんだと云つたんで大笑をしたが、老梅君と君とは反対の好例として新撰蒙求に是非入れたいよ」と迷亭君例の如く長たらしい注釈をつける。

漱石は、折しも『蒙求』型類書の輩出が最盛期を迎え始めようとする明治14年14歳の春に、東京府立第一中学校を中退の後、麹町の二松学舎に転校して漢学を学んでいる。この「新撰蒙求」の下りは、その頃からブームになった『蒙求』型類書、特に異種『蒙求』の輩出状況が強く印象に残り、かような叙述に反映したに相違あるまい。そして、自ら「新撰蒙求」の作成を志している迷亭君は、相当の漢学的素養を自他ともに認められている人物として造型されていることが、この発言からも読みとれるのである。

さて、上記『蒙求』型類書の輩出状況を見るに、元の胡炳文の『純正蒙求』関係の注釈書が大きな位置を占めていることも注目される。『純正蒙求』は、原撰の李瀚『蒙求』よりも、より訓導に相応しい故事をばかりを選び『小学』外篇に倣って編纂されたもので、朱子学的な色彩の強いものである。本書は、文化(1804)元年の官板を下敷きに、明治(1882)15年に6種、翌16年に2種、17年に1種と短期間の内に多量に刊行されている。

この書がもてはやされた一因として、明治(1879)12年に元田永孚(ながさね)の起草による『教学聖旨』を契機に、従来の欧化政策から復古の流れへと転換が図られたことが

考えられる。この方針に従って明治14年に制定された『小学校教則綱領』では、修身科が筆頭教科に挙げられるなどの結果、学制期には避けられていた漢学・漢文教育を含む儒学教育が再び重んじられ、小学校の中等科以上では漢文の教科書も使用され（明治14年５月４日文部省達12号小学校教則綱領）、中学校では和漢文科が設置されるに至っている（明治14年７月29日文部省達28号中学校教則大綱）。

しかし、このような機運の中で隆盛の兆しを見せた『蒙求』型類書の輩出も、明治(1886)19年（明治19年第５号文部省令第７号５月10日）～36(1903)年（明治36年第６号６月20日）の教科書検定制の導入、さらには、その後の国定教科書制の発足にともない、かつての趨勢を失ってしまったのであった。

明治(1895)28年３月６日の『学海日録』に、次の記述がある。

> 野口寧斎来る。岩谷季雄の書をもち来りて、余が艸にかゝる少年世界の英武蒙求をのする事をやむといへり。余が文は時好に投ぜず。さればこれを読む事を好まざるもの多きもむべなりけり。

わずか半年の短い連載であった。

注

(1) 『近代著述目録集成』（勉誠社、昭五三・一二）収載による。

(2) 片桐一男『蘭学、その江戸と北陸――大月玄沢と長崎浩斎――』（思文閣出版、一九九三・五）、第一部「七　長崎浩斎の年譜・系譜・系図」所収の「１　長崎家譜」には左記のように記す。

長崎家譜

孫兵衛妻モ鳥山屋次郎兵衛ヨリ来レリト云、夫故家々ノ一家称スルカ不詳

家祖ハ萩原氏、俗名孫兵衛ト云、東都ノ浪士ナリ、肥前長崎ニ趣キ、学ヒ医十有五年、元禄・宝永ノコロ、故有テ越ノ高岡ヘ来ル、旅客中、療治奇効有ルヲ以テ、人居ヲ高岡ニトセン（ボク）ヲ請、因テ、横川原町ニ住ス、人其効ヲ称テ本姓ヲ呼（ヨバ）ズ、長崎ゝゝト云、遂ニ氏トナル、……（後略）……

(3) 長崎家系譜（片桐一男『蘭学、その江戸と北陸――大月玄沢と長崎浩斎――』第一部「七　長崎浩斎の年譜・系譜・系図」所収「４　長崎家系譜」）には、次の如く記される。

長崎家家譜

世代	法　名	氏　名	生年月日	死亡年月日
初代	釈了祐信士	萩原孫兵衛 改萩原玄澄		享保18.6.9
	釈妙祐信女	萩原玄澄室		宝暦7.5.1
二代	釈寿慶信士	萩原玄貞		安永6.2.29
	釈栄受信女	萩原玄貞室		宝暦4.11.8
三代	釈菊故信士	萩原玄貞		安永8.11.26
	釈円順信女	萩原玄貞室		安永7.6.15
四代	釈純敬信士	長崎玄庭 ［備考］富山藩下大夫吉川敬明次男、寿字莱福蓬洲と号す	明和2.9.11	文政12.12.9
	釈永浄信女	長崎玄庭室 ［備考］むら	明和4.	文政13.9.8
五代	釈香潔	長崎愿禎 ［備考］浩斎と号す、幼名哲次郎	寛政11.9.7	元治元.9.14
	釈貞婉信女	長崎愿禎室 ［備考］金子元仙姉くら	享和2.11.7	安政2.4.21
六代	松風風水月居士	長崎言定 ［備考］幼名周蔵、後正国と改める	文政9.5.27	明治7.8.27
	仙露明珠大姉	長崎言定室 ［備考］逸見文九郎妹もと	天保2.12.27	明治45.9.6

(4)　阿波加修造『春塘随筆』〈『高岡史料　下巻』（高岡市、明四三・九）八一七頁〉

安永ヨリ文化ニ至ル頃高岡町ニ長崎芳洲翁アリ外科医術ヲ以テ大ニ行ハル　本萩原氏ナリシガ曾テ肥前長崎ニ於テ蘭医某ニ就キ　其業ヲ受クルヲ以テ誰言フコトナク長崎医者ト持テハヤサレ竟ニ長崎ヲ以テ自称スルニ至ル　人ト為リ豁達ニシテ客ヲ愛シ子女ヲ教育スル常規ヲ以テセス子名ハ健字ハ玄貞、養浩斎、又清風明月楼主人、鴉郊居士ナドノ号アリ字ヲ以テ行ハル　家学ヲ伝ヘテ益ゝ　其業ヲ盛ニス学識淵博、詞藻豊富、詩賦ヲ大窪詩仏ニ書法ヲ市河米庵ニ学ビ交游之盛一時ヲ圧倒ス千字文（傍線筆者）蒙求ノ二書ヲ愛読シ各数十百種ヲ聚メ書庫ヲ号シテ千文山蒙求寺ト称スルニ至ル奇癖想フヘキナリ嗚呼博洽ノ資ヲ以テ芳洲ノ業ヲ継ク一時ヲ風動スル亦宜ナラスヤ但没後万巻余ノ蔵書散逸シテ帰スル所ヲ知ラサルニ至ル　惜シムヘキカナ……（後略）……

(5)　都立中央図書館日比谷加賀文庫９号『補訂浩斎所蔵千文蒙求目録』３オ～３ウによる。

(6)　前掲の都立中央図書館日比谷図書館加賀文庫９号による。なお、高山郷土館荏野文庫雑部１４号には、「浩斎所蔵千文書目」のみが残されている。

(7)　以下の大槻玄沢と長崎浩斎の往復書簡「第38号書翰」（文政９年11月17日）による。〈片桐一男『蘭学、その江戸と北陸―大月玄沢と長崎浩斎―』第一部「四　大槻玄沢と長崎浩斎の往復書簡」所収〉

……（前略）

一千文目録　　十冊

御恵投、好事家へ追ゝ贈り、皆ゝ感心、悦被申候、桂家へも贈申候、去ル方より蒙求之条下

候、

○朱子純正蒙求官刻と書入遣候、此書ハ御覧候被成候や

（後略）……

(8) 片桐一男『蘭学、その江戸と北陸―大月玄沢と長崎浩斎―』第一部「六　主要なる軸物・一紙文書」「1　長崎浩斎先生肖像」による。

(9) 「薦二蒙求一表」に記される唐の天宝5年8月1日の李良上表時を以て成立と考える。

(10) 各書目の内容については、拙稿「長崎浩斎（健）・東条琴台（耕）の『千字文』『蒙求』目録―日比谷加賀文庫蔵『補訂浩斎所蔵千文蒙求二種書目』翻刻―」（『中野猛先生還暦記念論集』所収、平8［刊行予定］、新典社）を参看せられたい。

(11) 東条琴台の事蹟については、以下の論考がある。

○西岡豊作『東条琴台』（東京堂、大7）

○下田歌子「東条琴台翁事蹟」（「史談会速記録」246、大2）

○「東条信耕〈琴台〉」（「自治」13―2、昭11）

○ロバート・キャンベル「東条琴台伝記資料攷（上・下）」（「実践女子大学文芸資料研究所年報」7・10、昭63．3・平3．3）

なお、東条琴台は、実践女子大学の前身、実践女学校の創始者下田歌子の祖父にあたる。また、かつて同校に奉職された山岸徳平氏旧蔵書よりなる「山岸文庫」が収められるが、同文庫にも氏の蒐集になる多数の「蒙求」が収められている。

(12) 徐子光の新注の日本への渡来時期は、未だ不明だが、その講釈が行われた初見としては、『実隆公記』永正元年（1504）閏3月20日の記事が確認されている。

廿日辛亥晴、天気快然也。今日蒙求講尺事、依兼日約諾菅少（高辻）納言章長朝臣来臨、以補注講之、表并序二至甫誠乳虎講之、其所作神妙也（……後略……）

(13) なお、これには『千字文』の「秋収冬蔵（しゅうしゅうとうぞう）」等の下りと混同されたという見解もある。〈太田晶二郎「勧学院の雀は、なぜ蒙求を囀つたか」（『太田晶二郎著作集』第一冊所収、吉川弘文館、平3．8）〉

(14) ○尾形裕康『我国における千字文の史的研究』（校倉書房、昭41．3）・同『近代日本における千字文型教科書の研究』（早稲田大学出版部、昭53．3）

(15) 李良「薦二蒙求一表」に、「漢朝王子淵製二洞簫賦一。漢帝美二其文一、令二宮人誦習一。近代周興嗣撰二千字文一、亦頒二－行天下一、豈若二－蒙求一哉。」とある。

(16) たとえば、旧足守藩の記録では、かつては藩主自らが『桑華蒙求』を編集して勧学に供した故実があるにもかかわらず、幕末期の教則には、同書は使用されなくなっている。

沿革要略　慶長六年藩地知行以来木下肥後守公定邸内ノ学舎ニ於テ諸士及其子弟ヲ教育シ宝永ノ頃藩主木下公定学ヲ好ミ身自ラ教育ニ力ヲ尽シ童蒙ノ為桑華蒙求ヲ編輯シテ子弟ニ与ヘテ勧奨シ学事頗ル振興セリ（…中略…）

教則　旧追琢木舎ニ於テハ左ノ書ヲ用ユ　古文孝経、論語古訓、趙註孟子、毛詩鄭箋、古文尚書、文選、十三時、唐詩選、其外史類○元治以後ニ至リテハ左ノ書ヲ用ユ　朱子四書集註、詩経朱伝、書経蔡伝、春秋胡氏伝、易経集註、礼記集経、朱子小学、日記故事、近思録、文章軌範、唐宋八家文、十八史略、国史略、右之外左国史漢綱鑑易知録通綱目ノ類

(17) 柏原学而の次男の知格・三男の致は、『格致蒙求』の語源となった格物致知・致知格物にちなみ、徳川慶喜が名付けたものである。（土屋重朗『静岡県の医史と医家伝』「第七章　柏原学而伝」、昭48・5、清水市戸田書店）

討議要旨

ロバート・キャンベル氏から「『蒙求』が明治10年代に盛行したという御指摘は、非常に興味深いと思います。『蒙求』や教科書類にかぎらず、西南戦争以降日清戦争あたりまで、三都を中心に漢学が復興してきて、こういった書物をあつかう専門書店まで出来て、たいへん流行っているようです。『蒙求』の盛行には、こういった背景があったのではないでしょうか。また、藩校の文庫などを訪ねると、幕末・明治ころの『蒙求』がたくさん出てくることが多い。かならず出てくるのが『箋註蒙求』です。『蒙求』に対する受容の変化とか、『純正蒙求』という本が、なぜ明治15年頃にたくさん出ることになったのかといった点を教えていただきたい。」との発言があった。発表者は『純正蒙求』が明治15年ころ一時に盛んに出るのは、おっしゃるように当時の漢学復興の風潮、これは欧化主義への反動の側面が強いと思うのですが、また『二十四考』『孝行録』などの影響を考えなければならないと考えていますが、受容の実態ということになると、まだまだ考えねばならない事が多いと思います。」と答えられた。